

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策
						到達	状況	評価	考察	
① 学習指導	確かな学力の育成	生徒が主体的に学習に取り組む態度を高めるために、わかる授業を展開する。授業内容によっては、TT指導や支援員の効果的な活用により、きめ細かな指導を実施する。 また、教材研究に努め、ワークシートや資料の工夫、ICT教育機器の有効な活用を図る。 家庭学習の充実を図るために課題やプリント・副教材の演習問題など積極的に提示し、実施の有無の確認や評価及び主体的に取り組むための支援に必ず取り組む。	生徒が主体的に学習に取り組むことができ、わかる授業づくりに取り組む。TT指導や支援員の積極的な活用と授業教材やICT教育機器の有効活用を取り入れる。	最初に「めあて」を提示して授業に臨み、説明を聞く場面、知識・技能を習得する場面、思考する場面、表現や発表する場面を明確にし、生徒が授業で、知識・技能を習得し、思考・判断・表現する力を育成する。授業の終わりでは「自己の振り返り」を行うことで、学びの成果を実感させ、学んだことや意欲・問題意識等につなげ、家庭学習や次時の授業につなげていく。	A 生徒が主体的に学習に取り組み、わかりやすい授業が展開されるとともに、学級全体が学習へ向かう態度が向上し、生徒の自己学習力が向上している。	授業冒頭での「めあて」を提示することで、授業内容や身に付けなければいけないことが明確になり、生徒の学習意欲が高まったり、理解が深まることにつながった。また、授業の終わりに「振り返り」をすることで、授業内容の理解の確認や意欲の自己評価をすることができた。さらに、次時の授業や家庭学習で取り組むべきことを考え、実行することにもつなげることができた。 学習内容を深めたり、自分の考えを整理するためにも、自分の考えを伝え合ったり、深め広げられる話し合いの場を設定する授業に取り組んだ。このことにより、説明する方も説明を聞く方も、学習内容を深めたり、新しい気づきにつなげることができた。 各教科間での情報交換、綿密な教材研究、家庭学習につながるわかりやすい授業ワークシートや演習問題プリントの工夫と作成、副教材等の資料、実物投影機や教具、タブレットを活用した授業を実践してきた。また、公開授業と授業研究を実施することで、教員の授業力向上を図った。また、積み重ねの教科や実技を伴う教科では、TT指導や支援員の活用を図り、よりきめ細かな指導が行き届くように心がけた。 言語活動を充実させる思考力、判断力、表現力を育成するために、言語活動の場面を取り入れ、既習の知識・技能を活用して自分の考えをもち、根拠を挙げながら記述したり、ホワイトボードや実物投影機などを使用して発表し合ったりすることで、より深い理解へと導いた。	B	・わかる授業を展開するために、授業冒頭での「めあて」の提示や授業終わりの「振り返り」を各教員が徹底して行い、生徒が学習内容を十分理解し、その結果生徒の学習意欲の向上等につながっている。また、チームティーチングや学校支援員の活用により、生徒に対してきめ細かな指導が行われている様子がわかる。その一方で、自己評価は判断基準をもった「わかる人」には有効だが、「わからない人」には正しく振り返ることができないケースがある。「振り返り」の方法は、わからない人でも書けるようなひな型や一人一人のフォローが重要となる。また、アフターフォローとして、振り返りでできなかった課題を本人ができるようにしたかどうかのチェックまでであるとよりよくなる。今後、授業データをウェブ上で復習できる（倍速再生や好きな所から再生）ようになれば、より復習しやすくなり、それが家庭学習の定着及び基礎学力の向上につながっていく可能性があるのではないだろうか。	B	・生徒が何をめあてに授業に参加すればよいのかがわかるため、引き続きすべての授業で「学習のめあて」の提示をする。 ・生徒自身が理解できたかどうかを把握し、家庭学習での復習につなげたり、教師も生徒の理解度を把握したりするために「振り返り」を大切にす江津中スタイルを継続する。しかし、年度初めに振り返りをしやすいスタイルや方法を教科の特徴を活かす確認する必要がある。復習に関しては、自学ノートの活用を推進し、学年部と連携を取りながら行う必要がある。 ・わかる授業を進めるうえで、教材研究や生徒の理解度の情報交換を、教科間の連携、教科担当と学年部の連携、支援員との連携を密に行うようにする。
					A 各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続して行い、家庭学習習慣が定着している。（平日90分超、テスト期間120分超）					
B 家庭学習の重要性を意識せず、全体として家庭学習時間が不足しており、習慣化にはほど遠い。（テスト期間でさえ60分未満）	今年度は、「性の多様性」への理解をテーマに学んだ。11月中旬より校長による各クラスでの絵本の読み聞かせや同じ指導案を使っている道徳の時間、特別活動等で「性の多様性」に触れる学習機会をもち、12月10日に雲南市教育委員会の佐藤文宣さんに、「みんな違ってみんないい～誰もが自分らしく生きるためにはどうしたらいいか～」という演題で人権講演会を実施した。講師から、生徒たちは4人での話し合う場面も提供していただき、主体的に考え話し合う姿を見ることができた。講演後には、生徒からの質問も活発に出た。講演会当日の事前指導として、性の多様性を生徒とともに考え、講演会に向けて、道徳や特別活動などの時間も活用しながら学びを深めたい。 人権宣言に関連した人権集会を実施予定だったが、感染症予防のこともあり、学級単位の話し合い活動になってしまった。代議員会主体で、全校生徒に人権に関する学びのしきみは定着してきたので、さらに生徒が自ら積極的に人権課題の解決に向き合う態度を身につけるよう来年度に向けて検討したい。	B	・人権講演会を実施し、他の個性を認め合い、互いに助け合う心を育むことができてきている。また、人権講演会を行う前に事前の学習機会を設け、生徒が講演会へ臨みやすい環境づくりがされている。そして講演会で生徒から活発に意見や質問が出されたことは、講師の話真剣に耳を傾け、自分のこととして捉え考えていることがよくわかる。生徒のアンケートでも見られるように、他人を思いやり、自分を大切に、みんなと協力して物事を解決していく姿勢は徐々に定着してきていると思うので今後も引き続き指導をお願いしたい。加えて「個」の違いに対する寛容性を醸成する取組等、一層の充実を希望します。さらに、世間の一般的な人権の話聞くだけでなく、生徒たちの権利を身近なところで考える時間があってもよいと思う。全ての校則をもう一度全生徒で見直していくなど、生徒一人一人が考えてほしい。	B	・人権講演会のテーマについては年度当初に決め、それについて、事前の学習を道徳や特別活動を各学年に応じて行い、講演会につなげたい。保護者の参加も可能になるよう日程も工夫したい。 ・校則（生徒心得）については、3年生の社会の公民の時間の人権でふれるが、「他校と比べて、スカートが長い。校則を守っている。」という程度であった。生徒の中では規則を守るという考えの方が強く、時代とともに人権感覚は変化していくという考え方が教員も生徒も必要だと思ふ。寒くなり、ひざ掛け持参がよくなり、その時に女子にもズボンも選べるようにしてほしいという意見が聞こえてきた。そういう生徒一人一人のつぶやきを大切にしていきたい。人権宣言は完成した。					
C 家庭学習の定着が不十分であり、全体として家庭学習が停滞傾向である。（平日60分未満、テスト期間90分未満）						人の個性を認め、助け合いながら生活していくことについて考えるきっかけとなる場として、人権集会や人権講演会を実施する。 生活しやすい江津中になるように、江津中の人権宣言をつくる。 日常の生徒の様子に応じた指導、助言をする。	A 人権集会や人権講演会を通して、生徒が個性を尊重した生き方について考える。江津中の人権宣言が完成し、それを意識して行動する。	B 人権集会や人権講演会を計画的に実施。人権宣言が完成する。	C 人権集会や人権講演会の内容が生徒の実態と合わない。人権宣言が不完全にしかできない。	D 人権集会や人権講演会が実施できない。人権宣言が完成しない。
D 家庭学習の重要性を意識せず、全体として家庭学習時間が不足しており、習慣化にはほど遠い。（テスト期間でさえ60分未満）	A 人権集会や人権講演会を通して、生徒が個性を尊重した生き方について考える。江津中の人権宣言が完成し、それを意識して行動する。	B 人権集会や人権講演会を計画的に実施。人権宣言が完成する。	C 人権集会や人権講演会の内容が生徒の実態と合わない。人権宣言が不完全にしかできない。	D 人権集会や人権講演会が実施できない。人権宣言が完成しない。	B					
D 家庭学習の重要性を意識せず、全体として家庭学習時間が不足しており、習慣化にはほど遠い。（テスト期間でさえ60分未満）						A 人権集会や人権講演会を通して、生徒が個性を尊重した生き方について考える。江津中の人権宣言が完成し、それを意識して行動する。	B 人権集会や人権講演会を計画的に実施。人権宣言が完成する。	C 人権集会や人権講演会の内容が生徒の実態と合わない。人権宣言が不完全にしかできない。	D 人権集会や人権講演会が実施できない。人権宣言が完成しない。	B

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	評価		学校関係者評価		改善策	
						自達	己成	状況	評価		考察
① 学習指導	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ、表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	朝読書を継続して行い、学校図書館利用増をめざして読書推進活動を充実する。	「利用しやすい図書館」として、図書館利用者の増加、家庭での読書の習慣化を図る。教科学習における図書館利用にも一層の活用を推進していく。読書ノートの活用を継続することで、充実した読書記録とする。	A	図書館利用が増加し、家読が定着（家読30分以上）	<p>図書の貸し出し状況は例年同様充実している。図書の購入に関しては、授業で活用できる図書や生徒が興味・関心をもっている分野の本を入庫することで、図書活用の活性化、充実につなげていきたい。例年どおり、図書館だよりや委員会活動での情報提供、季節や行事ごとのレイアウトを工夫し、生徒が立ち寄りやすい環境作りに取り組んだ。生徒の要望を聞いて興味・関心をもっている本をリクエスト本として定期的に購入し紹介することは、今年度も継続できた。しかし、職員から要望を聞いての図書の購入はできなかった。</p> <p>昼休みなど密になりやすい図書スペースであるため、今年度は感染予防対策として、パーティションの設置（貸し出しカウンター）、座席の制限、消毒の設置、定期的な消毒を行った。しかし、表示があるにもかかわらず、従来どおりの座席を利用するなどといった状況も見られた。コロナ禍でも安全に利用できる図書館にしていく工夫をしなければならない。</p> <p>家読については、アンケートの結果【資料2】から、「自宅で読書をする」と答えた生徒は36.5%と前年度の58.5%から大きく下がった。理由としては、「他にすることがある」という意見が多く、宿題や部活などで忙しい中学生の生活に読書が浸透していないことが考えられる。「本を読むことが（どちらかといえば）好き」と答える生徒は69.4%と前年度の77.2%から約10%下がった。「本を読む理由」について聞いたところ、「おもしろい」という理由が68.5%と最も高く、その次に「勉強になる」という理由が25.9%だった。ここには、「本を読むことが（どちらかといえば）嫌い」と答える生徒の意見も含まれており、「嫌い＝読書の価値を知らない」というわけではないことが考えられる。読書以外にやることがある生徒や日頃本を読まない生徒が、朝読書を通して本に触れることで本のおもしろさや読書のよさに気づけるよう、工夫して読書啓発に取り組む必要性があることを、今回の結果をふまえて改めて感じている。</p>	C	<p>・図書館の貸出状況はここ数年で定着してきた。図書の選定も生徒のリクエストを取り入れたり、授業で活用できる本を積極的に購入されていることが大きな理由だと思う。ただ家読の時間に関しては昨年度に比べ大幅に減少している。単に読書に充てる時間がスマホなどのメディアなどに取られているためであろう。根本的に家庭で本を読む環境が整っていないように感じる。本を読むことが好きな生徒は多く、朝読書も何年も継続的に行われており、読書の意義や利点を認識させる取組や工夫が必要である。また、家読にこだわらず、1日のどこかで少しでも本を手にとるという形でも実施し、自らの限りある人生の中では経験できないことや情報、価値観に触れられる大切な時間をつくるようにしてもよいのではないかと。</p>	C	<p>・家読も含め、本を手にとることが定着するよう取り組んでいかねばならないと感じる。学校としては、今までのように朝読書の時間を取ることで、図書スペースの環境を整えること、本の魅力を伝えること、授業を通して本を紹介する機会をつくることに取り組み、読書の定着をめざしたい。また家読の定着を図るのであれば、長期休業などに各教科から出される課題を、読書（本1冊でなくとも部分読みでもよい）を必要とする課題を出すなどの工夫をすることも効果的だと考える。本を手にとること、本を読むことが、人生においてよい経験となることや、多くの価値観に触れられることなどを伝える機会を増やし、発信をしていきたい。</p>
					B	図書館利用が増加し、家読が習慣化（家読10～20分）					
					C	図書館利用が増加したが、家読が不十分（10分未満）					
					D	図書館利用が増加せず、家読も不十分（10分未満）					
言語活動の充実	「つながる力の育成」のために各授業で積極的に話し合い活動を行い、自分の考えを伝え合い、深め広げる授業づくりに取り組み、思考力・判断力・表現力の向上をめざす。	各教科等で、自分の考えをもち、伝える手だての工夫、話し合い活動を通して考えを深めることのできる題材の工夫をする。	全教科の授業で自分の考えをもち、考えを伝える場面の設定をする。そして、「話し合い活動」を活用して、生徒の考えを深め広げる。	A	各教科で工夫した「話し合い活動」を実施し、思考力・判断力・表現力が向上した。	<p>教員アンケートで「自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの場の設定」が「十分できた」・「できた」教員は80%、「次の授業や家庭学習にいかされる『ふり返り』の工夫」が「十分できた」・「できた」の回答は75%となっている。3年生の意識調査で「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う」の肯定的意見が84.4%と4月から5.9ポイント増加している。また、生徒アンケートで「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」の肯定的意見は、1学期が93%、2学期は94%とともに高く、言語活動を通して道徳性を養っていくことができています。</p>	B	<p>・教員アンケートでは「話し合いの場の設定」や「振り返りの工夫」ができたという回答が80%あった。生徒のアンケートでも肯定的意見が多く、話し合うことで、自分とは異なる意見を考えること、協力すること、自己肯定感があがっている。ここ数年の言語活動の取組の成果が表れている。特に道徳の授業に関しては、その成果が授業に厚みや奥行きを生んでいるようで、とても喜ばしく思う。この取組により、話し合い活動が充実し、生徒が自主的に授業に関わるようになり、思考力・判断力・表現力が身につけてきていると感じる。さらにこのことが家庭学習へのモチベーションへつながってほしい。</p>	B	<p>・「話し合い活動」において、自分の考えを深めるためには、お互いに意見の根拠を伝え、そこを手がかりにして話をしていくとよい。「根拠をもって説明できる」ように、ワークシートなど指導の工夫をすすめる。</p> <p>・「話し合い活動の基本型」を利用し、話し合いの進行がスムーズにできるようにする。指導者側が「話し合い活動」指導のポイントを共通理解し、全教科で取り組みやすくするために、研修等を実施し、効果的な実践について紹介をしていく。</p>	
				B	各教科で工夫した「話し合い活動」を実施した。						
				C	ほとんどの教科で「話し合い活動」を実施した。						
				D	「話し合い活動」の実施が不十分だった。						
② ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む本町探訪、修学旅行の企業訪問、事業所訪問、福祉学習、上級学校調べ、職場体験等の活動が系統的に、より一層充実するように努める。また、地域の「ひと・もの・こと」を活用することで、地域の魅力や課題の理解を進める。	A	全学年において、ふるさと・キャリア教育を複数回計画的に実施した。	<p>第1学年においては、ふるさと・キャリア教育を計画的に実施することができた。内容は本町探訪、地元企業の講話をもとにしたプレゼンテーション作り、地元の上級学校での講話をもとにした職業調べである。江津のよさを再確認し、自分の将来と関連させて考えることができた。</p> <p>第2学年においては、市社会福祉協議会の協力を得て、江津市の福祉の状況や中学生ができることについて出前講座を活用して学び、障がいのある人の理解を深めるため、バラスポーツ（ゴールボール）体験をする予定である。修学旅行が延期になったため、当初の計画で進めることができなかった。</p> <p>第3学年では、新型コロナウイルス禍で心配な面もある中、市内41の事業所において職場体験を行わせていただくことができた。自分たちの住む「ふるさとごうつ」の人たちと関わりながら、地域の方々の働く姿を見て、お話を聞いて、実際に自分で体験することにより、働くことの大変さやおもしろさ、難しさなど多くのことを学ぶことができた。この体験は、将来の自分自身の生き方を考えるよい契機になったと同時に、ふるさと江津の「ひと・もの・こと」のよさを再認識することができた。</p>	B	<p>・ふるさと江津の「ひと・もの・こと」を通じて、地域のことを学び、地域の人と交わる機会が保証されるのは大変よいことである。そのことで、生徒たちがふるさとに愛着をもち、将来江津の頼もしい人材になってくれればうれしい。職場体験も、コロナ禍の状況下で41もの事業所が協力してくださり実施できたことは大変有難い。事業所の方々への感謝の心をもつことも指導していただきたい。また、この体験が一過性ではなく、生徒の将来の人生のヒントになるように意識づけをしていただきたい。加えて教師という職業に憧れる生徒もいると思うので、教員も模範となるような行動をお願いしたい。さらに地域行事への中学生の参加はスケジュール的になかなか難しいとは思いますが、地域活動に興味をもつ生徒も少なからずいると思うので、地域コミュニティや自治会組織とも情報を共有してその機会を探してほしい。</p>	B	<p>・感染症対策もある中、地域の事業所をはじめ、たくさんの方に協力していただき、どの学年も体験活動を行うことができた。体験と将来の自分を関連づけるような振り返りを考える必要が。また、コーディネーターのお世話になるばかりではなく、教職員も地域の方との交流を大切にしていきたい。</p> <p>・校外に出かけた時のあいさつやお礼状書きなど生徒に指導するのに合わせ、大人も生徒の手本となるような態度を確認し合うようにしていきたい。</p>	
				B	ふるさと・キャリア教育を複数回実施した学年と一回実施した学年があった。						
				C	各学年、ふるさと・キャリア教育を1回実施した。						
				D	ふるさと・キャリア教育を実施できなかった。						

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	自己評価		学校関係者評価		改善策	
						達成	状況	評価	考察		
③ 生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	望ましい生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し、生徒の基本的な生活習慣、規範意識が向上する。 情報モラルについては、家庭への情報提供し、特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A	生活習慣、規範意識が向上し、ネットトラブル等が起きない	<p>挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じて様々な機会を使って繰り返し指導を行った。挨拶の声はまだ十分とは言えないが、靴揃えは習慣になってきており、ほとんどの生徒が意識して揃えていた。また、身だしなみについては、生徒会生活委員会が行う、毎朝の名札チェックや服装チェック重点週間の活動もあり、多くの生徒が身だしなみに気をつける意識を常にもち、学校生活を送ることができた。</p> <p>不要物の持ち込みや反社会的な行動は全くなし、一人一人が規範意識をもって生活することができていた。</p> <p>ネットトラブルについては、1・2学期に数件発生した。一時的な感情で発信（発言）したことで、不快な思いをした生徒がおり、家庭と連携して指導を行った。また、なりすましによるトラブルもあり、学級指導だけでなく、全校集会を行い、SNSの使い方を中心に指導した。また、外部の専門家を招き、学期に1回ずつ情報モラル講演会を実施し、全校生徒のモラル向上を図った。一方、PTA総会等の機会を通じ、保護者に対しても啓発を行っていたが、昨年度に続いて、感染症拡大防止の観点から研修会未開催など十分な実施には至らなかった。「スマホ・インターネットの家庭内の約束」が徐々に形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないことが課題である。</p>	B	<p>・「挨拶」「返事」「靴揃え」は江中の誇れる伝統となっており、引き続き指導をお願いしたい。学校外での挨拶に関しては挨拶が返ってこない生徒もたまにいるが、多くの生徒は元気よく挨拶を返してくれる。また、生徒会生活委員会による重点活動により、生徒の身だしなみについての意識が向上したことはよいことである。また、継続的に行っている情報モラルの取組だが、今年もネットによるトラブルが数件発生した。各学期に情報モラル講演会を開き、生徒のモラル向上を図っているが、次々と興味をそそる新機能が開発されている現状では今後ますますトラブルは増えていくことが予想される。しかし、多くのことを禁止するのではなく、危険性を知り、予測し、回避する方法を学んで利便性を得る方が重要である。もはや使うことが当たり前なので、「起きる可能性が高い」、「起きた後にどう行動すべきか」の段階に進んだ方がよい。今後も生徒だけでなく保護者を含めた啓発を行ってほしい。併せてノーメディア習慣について、取組状況とその効果がどれほどなのか分析してほしい。</p>	B	<p>・引き続き、「挨拶」「返事」「靴揃え」を継続していきたい。また、今年度挨拶が課題になったため、生徒会を中心に挨拶に関する取組を考え、実施していきたい。</p> <p>・情報モラルについては、中学校のみならず小学校でも必要性が高くなってきており、小学校とも連携を取りながら、発達段階にあった指導を心掛けることと、内容の精選を行いたい。</p> <p>・昨年度も行ったが、校区小中学校同じ期間にノーメディア週間を設け、「スマホ・インターネットの家庭内の約束」が守られるようにしていきたい。また、ノーメディア週間の記録を残していきたい。状況の把握を行い、対策を考えていきたい。</p>
					B	生活習慣、規範意識が向上					
					C	生活習慣、規範意識が向上せず					
					D	生活習慣、規範意識が下降					
④ 健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己健康管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	1日のスタートの要となる朝食摂取について、昨年度までの朝食摂取の取組を土台に、朝食の内容の充実を図るための取組を行う。栄養教諭と連携を図り、家庭科や学級活動で指導した内容を長期休業中に家庭で実践する場を設定することで、生徒及び家庭への啓発を行う。	A	積極的な健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が定着	<p>今年度は、夏季休業中と冬季休業中に「朝食チャレンジ」を実施した。夏季休業は期間が長いこともあり、「朝食に一品プラス」「味噌汁を二日間作る」「朝食の献立を自分で考えて調理する」という三つの取組をすべて行った生徒が、36%あった。特に3年生は部活動を引退した生徒がおり、生活習慣を整える意味でも朝食を意識することがよくなったという感想があった。冬季休業は期間が短く、三つの取組をすべて行った生徒は22%と減少したが、「朝食に一品プラスする」取組には半数の生徒が取り組んでいた。「朝食に一品プラスする」取組では「普段の朝食のバランスが悪いと思った」「一品プラスするだけでバランスが取れると思った」、また「味噌汁を作る」取組では「親子で味噌汁の具を何にするかと話し合った」、「具を工夫すれば栄養のバランスがよくなることに気づいた」という感想が書かれていた。「朝食を自分で調理する」取組では、「どんな野菜を使うのか考えた」「意外と難しかった」という生徒の感想があったが、保護者からは「前回作ってくれたときより手際よく作ってくれた」「こういうきっかけで朝食の栄養バランスを考えることができる」という感想があり、栄養面で朝食を考える機会になったことがうかがえた。長期休業中の課題としての取組だが、「継続し意識したい」という声が多くあった。意識付けのきっかけとして今後も長期休業には取組を示し、日常的に健康に配慮した朝食摂取につながるようにしたい。栄養士にアドバイスを求め、よりよい取組となるよう改善したい。</p>	B	<p>・昨年までの朝食摂取の取組の成果を踏まえ、「朝食に1品プラス」など新たなチャレンジを3つ追加して実施。この試みは生徒自身が食生活を見直す意味で大変意義があり、心身ともに成長期の中学生にとって、栄養バランスや食の大切さを考えるよいきっかけになったと思う。また、子ども自らが調理をすることができれば、自分自身で健康を守ることができ、将来的な自立等でも必要である。併せて、食は毎日のことで、少しの改善でも大きな効果が生まれるので、今後も生徒と保護者が食生活についてもっと興味・関心をもっていただくため、いろいろな企画を考えてほしい。</p>	B	<p>・朝食チャレンジを1年に2回実施することで、家庭での食生活を見直すきっかけとなるよう今後も実施したい。家庭の協力が得られるように、負担が少ない形での実施を考えたい。</p> <p>・栄養教諭の指導や助言をいかし、成長期の食習慣や栄養バランスへの関心を高めるなど意識付けをしていきたい。</p>
					B	自己の健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が習慣化					
					C	自己の健康管理に努力が必要					
					D	健康管理が不十分					
④ 健康の増進・体力の向上	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため、家庭での健康・体力づくりを行う。体育の授業において保健分野からの指導など授業改善に努めていく。長期休業前に、体力づくりの啓発を行い、家庭との連携を図る。	A	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践	<p>多くの生徒が運動の必要性を理解し、意欲的に運動に取り組む姿勢が見られた。特に、長期休業前は、体育科が中心となり、計画を立て、毎日記録をさせることで意識を高め、内容や運動強度についても、個別に選択できるようにいくつかの選択肢を示したため、取り組み易かったのではないかと推測する。しかし、各学年の長期休業中の運動時間を平均すると、1年生が30分、2年生が36分、3年生が27分となった。昨年度より運動実施目標時間を40分としたが、学校全体の平均が約30分であり、昨年度と同様な結果となった。</p> <p>今年度も、生徒会体育委員会の取組として「体力づくり」を行い、月1回長縄跳びを行った。コロナ禍にあり、全員で集まっての活動が難しい中、生徒を中心に対策を考え、頻度は少なかったが実施できた。</p> <p>新型コロナウイルス感染症の拡大により、家で過ごす時間も増え、「運動したい」「体を動かしたい」「汗をかいてすっきりしたい」という生徒が増えてきているように感じる。生徒の意欲に沿った指導を心がけ、例示を増やして選択の幅を広げ、誰もが進んで運動に取り組めるような工夫を引き続き考え、来年は目標が達成できるようにしたい。</p>	C	<p>・新型コロナの影響により、成長期真っただ中の中学生が外で思いっきり体を動かすことができず、また部活動も制限を受けているこの2年間の現状を見るにつけ、運動不足が心配された。しかし、学校では生徒会体育委員会の「体力づくり」の取組や休業中で個々の体力に合わせたメニューを提供するなど学校側が計画を綿密に立て、取組を促している。学校での取組と家庭での対応をリンクさせ、運動不足の解消に向け、粘り強く進めてほしい。手段の選択と記録による意識づけなどを行い、運動をしない層に働きかける取組を期待する。</p>	B	<p>・コロナ禍の制限はこの先も続くと考えられるため、臨時休業期間中に出したトレーニング例も含め、一人でもできる運動メニューをさらに増やしていきたい。</p> <p>・体を動かすだけでなく、得られる効果についても伝えていくことで、自主的に運動に取り組む生徒を増やしていきたい。また、おたより等を活用して家庭にも啓発できるようにしていきたい。</p>
					B	計画的に健康・体力づくりを実践(40分以上)					
					C	計画的に健康・体力づくりを実践(15分以上)					
					D	健康・体力づくりが不十分(10分未満)					

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	評価		学校関係者評価		改善策	
						自達	己成	状況	評価		考
⑤ 安全管理・指導	学校安全の推進	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと、毎月15日の安全点検実施に伴い、点検・修繕・修理を迅速に行う。 食物アレルギー対応委員会を組織し、実態と対応を把握する。	A マニュアル改善、点検・修繕等を迅速に実施し、安全推進  B マニュアルの改善、点検・修繕等を迅速に実施  C 点検がきちんとでき、必要に応じ修繕・修理  D 点検はきちんとできたが、修繕・修理が不十分			B	・今年度は生徒目線による安全点検を実施した。生徒たちからのいくつかの改善の指摘が見られたことはよかった。また定期的に行うのもよいが気づいたときにすぐ報告できる場所・ノートなどがあってもよい。ただ構造物である限り経年劣化は不可避であり、校舎及び各種設備等の改善・改修は市担当課と連携をとり、より綿密な安全対策・危機管理対応を実施してほしい。 ・危機管理マニュアルは毎年点検、更新をし、ブラッシュアップするとともに、可能な限りシミュレーションを行い、机上の空論にならないよう、緊急時に即対応できるようにしてほしい。 ・命にかかわるアレルギーをもつ生徒たちに養護教諭を中心に一人一人面談し、丁寧に対応できている。情報を早期に把握し、保護者や小学校とも連携し、万が一の事態を想定し、個に応じたよりきめ細かな対応の継続を望む。	B	・生徒目線による安全点検の実施は今後も継続した取組としたい。また、校舎等の各種設備においては、市教委と連携を図りながら必要に応じて対応していきたい。 ・危機管理マニュアルの見直しは毎年行うとともに、報告、連絡、相談の徹底も図りたい。
	安全対応能力の向上	安全意識を高め、危機回避能力、危機対応能力の向上をめざす。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話、実習等で、生徒の安全意識の向上を図る。特に、自転車通学生交通マナーを遵守させる。消防署等と連携した計画的な避難訓練を実施する。	A 危機回避の講話、実習等の実施で安全意識が向上  B 危機回避の講話、実習等を実施  C 危機回避の講話、実習等を一部実施  D 危機回避のための講話、実習が不十分			B	・今年度は自転車のマナーアップ指定校に選ばれ、自転車の安全運転についていろいろな講習を行ったが、年度当初の新1年生の特に女子の自転車の運転は非常に不慣れで危ない場面も多々見かけた。大きな事故がなかったことは何よりである。登校時は目立ったマナー違反は見られないが、下校時や休日についてはマナー違反（ノーヘル、並列など）や危険運転の事例が少なからず見られ、事故に直結しかねない危険な事例もあった。今後、通学路の危険箇所の把握を生徒や保護者も一緒になって定期的に行い、警察や行政への改善要望をする必要もある。避難訓練は、今後もしばしばというときに素早く行動に移せるよう、様々な場面を想定しながら実施してほしい。また実際に起きた事例などからリアルな動きを考える訓練などもよい。学校近隣にある保育所、老人施設、病院、高校と市の防災を介して、合同での災害時の避難対応等の連絡会議を検討する必要性もある。薬物乱用については、どこの薬局でも簡単に手に入る市販薬の大量服用など、薬物依存も進んでいるようなのでしっかりと指導してほしい。	B	・新1年生を対象とした自転車教室を入学後早めに設定し、安全指導を行う。また、登校時だけでなく、下校時の自転車マナーについても、「並列」「ノーヘル」の危険性を生徒に伝えていくことで登下校の交通ルールの徹底を行ってほしい。 ・避難訓練については計画的に実施することができた。今後は、近隣の外部機関との連携も視野に入れて取組を行ってほしい。
⑥ 特別支援教育	校内・個別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実させる。	適切な実態把握をもとに作成した個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実させる。	諸検査や複数の教員での観察など実態把握を行ったうえで、個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成し、遂行する。	A 個別の教育支援計画、指導計画を遂行し、成果が表れた  B 個別の教育支援計画・指導計画を実行した  C 個別の教育支援計画・指導計画を実行したが、計画の改善が必要  D 個別の教育支援計画・指導計画を実行しなかった			A	・様々なケースの支援を必要とする生徒は年々増加傾向にある。そういう現状の中で、生徒一人一人に対して、将来を見据えた個別の支援計画を作成し実施したことは大変評価できる。生徒は教員の異動によって担当が変わることに不安を覚えると思うので、引継をしっかりと、他の教員も情報を共有し生徒や親の不安を解消できるような体制を築いてほしい。また、個別支援の成果に関しては、保護者の協力があってこそなので個々の対応を慎重かつ丁寧に行ってほしい。	A	・次年度も年度初めに個別の教育支援計画や個別の指導計画について説明会を行う。 ・個別の指導計画に記載する手立てについて情報を提供する。 ・保護者への説明を丁寧に行う。

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準	評価		学校関係者評価		改善策	
						自達	己成	状況	評価		考
⑥ 特別支援教育	関係機関との連携、他校との交流の推進	教育、医療、福祉等の関係機関と積極的な情報交換を行うことによって、連携を強化する。	医療、福祉等の関係機関、近隣の特別支援学校と積極的な情報交換を行う。	関係機関、近隣の特別支援学校等との定期的な連絡体制を整える。	A	月1回以上の定期的な連絡を行い、支援が充実	今年度は関係機関との連携が昨年度より密になった。特別な支援を要する生徒が受診する際には、各担任が生活や学習の様子を文書にまとめ、医療機関に情報提供をしたり、保護者の要請に応じて受診に同行したりした。それにより、医師からより具体的な指示を得ることができ、症状や行動上の諸問題の改善に至ることができた。 しかし、情報提供の様式が統一されていないことや生徒一人一人に応じた情報提供のあり方などが共通理解されていないなど課題も見られた。 一方、特別支援教育コーディネーターではなく、学年主任が主体となったケースが実施されるようになったことは大きな成果であった。	A	・関係諸機関との連携は昨年度より一層充実している。また各担任が医療機関に情報提供したり受診同行したりして、生徒に寄り添うきめ細かな対応をされたことは、生徒本人のみならず保護者の方にも安心感や信頼感をもたらしたと思う。教員も医療機関から直接具体的な指示を得ることができたことは生徒が学校生活を送るうえで非常に有意義なことだと思う。ただ担当の教員個人にのみ負荷がかかることを願う。また今年度は、ケース会議を学年主任が主体になって行われたことで学校全体で情報を共有し、生徒をバックアップするという観点からも非常に意義がある。	A	・今後も可能なときに受診同行を継続する。 ・受診同行が有意義なものになるように医療への情報提供の際の様式の案を作成した。その案をもとに生徒の実態に沿うよう改訂を重ねたい。
					B	月1回以上の定期的な連絡					
					C	学期に1回以上の連絡					
					D	連携、連絡も不十分					
⑦ 研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、生徒の「つながる力」を育成する。	校内研修の充実により、「次の授業や家庭学習に活かされる振り返りの設定」、「自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの設定」、「学習内容が将来や社会とつながっているという意識づけ」を実践する中で授業力の向上をめざす。	授業改善アクションプランの3つの具体的な取組(①「振り返り」の工夫、②自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの設定、③今学んでいることが自分の将来や社会とつながっていることを意識できる授業づくり)をもとに授業実践をすすめ、校内研修を計画的に行い、教職員どうしが学び合う機会を設ける。	A	1人1回以上の公開授業の実施により授業力が向上	今年度も1人1回以上の授業を公開し、授業力の向上に努めた。教員による学校評価での「授業研究に努め、授業力の向上を図ることができたか」の肯定的評価の割合は1学期は100%、2学期は95%という回答であり、ほぼ全員が授業力向上を図ることができたという回答している。教員アンケートで「今学んでいることが、自分の将来や社会とつながっていることを意識できる授業づくり」が「十分できた」・「できた」の回答は65%であり、指導方法の工夫が進んでいる。キャリア・パスポートで「今、学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えるなど、学ぶことや働くことの意義について考えましたか」の「よくできた」の回答の1学期から2学期での変容が1年生で29%→33%、2年生で35%→37%、3年生で30%→47%となっており、少しではあるが授業実践の効果が現れている。また、生徒による学校評価では「先生は、授業の『振り返り』をきちんと行っている」と回答した生徒が1学期は92%、2学期は86%と高い割合となっている。 キャリアパスポートの「つながる力」を問う設問で1学期から2学期への生徒の変容をみると、「周りの人の意見を聞く時、その人の考え方や気持ちを受け止めようとしたか」、「相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしたか」、「自分から役割や仕事を見つけ、分担するなど、周りの人と力を合わせて行動しようとしたか」の各設問に対する「よくできた」の回答が1学期から2学期は増えている。しかし、「よくできた」の回答が8割に満たないので、「自分の考えを伝え合い、深め広げられる話し合いの設定」の継続が生徒の「つながる力」のさらなる向上に必要と考える。	B	・全ての教員が授業改善アクションプランの具体的な取組をもとに、公開授業や校内研修を計画的に実施し、自らの授業力の向上に努めている。生徒の評価からも授業でいえば、めあてを示しており、授業の質問に対応していることから、目標立てとフォローをしっかりとされていると思う。ただ、授業の振り返り、授業の説明や進め方のわかりやすさで生徒のポイントが落ちている。教員へのアンケートからも「次の授業や家庭学習にいかされる振り返りの工夫」や「今学んでいることが、自分の将来や社会とつながっていることを意識できる授業づくり」において、他より苦戦されているように思えるので、学校全体や学年、教科間で連携を図って取組を推進してほしい。	B	・「授業改善アクションプラン」の3つの柱を各教科で具体的にどのように取り組むかを、教科部会で話題にし、共通理解のもとで授業実践をする。特に「振り返り」が、興味・関心をもった内容等の家庭学習への動機づけとなる工夫をしていきたい。 ・1人1回以上の授業公開を各学年部の教科担当者で参観し、「話し合い活動」や「振り返り」、「将来の自分や社会とつながっていることを意識できる授業づくり」などについて授業改善のヒントをお互いが得られるように計画をしていく。
					B	1人1回以上の公開授業を実施					
					C	公開授業を実施					
					D	公開授業を実施できなかった					
⑧ 保護者・地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って、学校だより、ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては、載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また、メール配信システムを緊急連絡だけでなく、諸活動の案内としても有効に利用する。	A	学校だより、学級通信、HP等による有益な情報を定期的に発信	今年度も、HPは毎月1回の学校だよりと次月行事予定表を定期的に更新することができた。一方で、生徒会活動、部活動の大会結果報告等については、活動の様子を発信することができなかった。しかし、HPでは伝えられなかった内容については、学年主任や学級担任がそれぞれ通信を作成して保護者に伝えることができた。今後は、生徒の活動の様子をHPにも掲載し、保護者をはじめ地域の方にもお知らせできるようにしていきたい。 メール配信システムについては、緊急時及びそれ以外(部活動)にも利用することができている。また、メールだけでは伝わりにくい内容については、紙媒体をHPにアップし、確認できるようにもしている。現在全保護者の登録を呼びかけているところである。	B	・新型コロナの影響を受けて、各種行事が中止や縮小されたり、保護者も参観日などもなくなったり、学校へ足を運ぶ機会がほとんどない状況である。そのため、今年も学校だよりの発行やホームページの更新は計画通りに行い、色々な情報を発信した。保護者もホームページや学校だよりを通して、学校や生徒の様子を少なからず把握できたことは有難かったと感じる。今後もメール配信システムと紙媒体を併用し、保護者等への連絡を継続してほしい。また、地域住民への発信についてはこれまでも議題に上がっているが、現実はなかなか難しい。年に1・2回程度、学校の様子をお知らせする情報公開ができないか検討してほしい。	B	・今後も、月の行事予定、学校だよりの公開は定期的に継続する。 ・今年度公開できなかった部活動、生徒会活動での情報発信を積極的に行うようにする。 ・メール配信システムは、緊急時以外でも積極的に活用できるように、職員全体に周知していく。
					B	学校だより、学級通信、HPを定期的に発行・更新					
					C	学校だより、学級通信を定期的に発行、HPは時々更新					
					D	学校だより、学級通信を定期的に発行、HPは更新できず					
学校間の円滑な連携・連動の推進	異校種間の連携・連動を図り、生徒の人間力の向上をめざす。	小中高の連携・連動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	小中高との交流・情報交換会、授業公開を積極的に行う。また、異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	A	小中高の計画的な交流により連携が充実	中学校区内の小中学校との交流については、10月に中学校に集合する形で「授業・部活動体験」を行った。授業と部活動体験の希望をとり、授業は英語と理科の2教科で行い、児童の感想からは、どちらの体験も楽しく充実した様子が見て取れた。部活動体験では、コロナ禍で室内の密を避けるため、雨の室内練習となった外の部活体験の実施を取りやめた。部活動体験で生徒が児童に丁寧に教えており、児童は中学校入学に期待が高まったようである。 昨年度同様、キャリア・パスポートの連携を図るふるさと・キャリア教育部会がそれぞれ開催され、小中中でめざす子どもの姿を共有することができた。 「ネット利用の家庭内の約束」づくりは、江津市全体で取り組み、チラシを作成し、保護者への周知も図っている。また、生徒へは情報モラル講演会などでも啓発を行った。11月の講演会では小学校6年生と中学生と引率教員が同じ話を聞き、共通理解したことを今後の指導につなげるようにしている。生徒指導面の連携では、学校警察連絡協議会での情報交換や、月例の校長会、教頭会等で情報や指導事項の共有に努め、日々の指導にいかした。	B	・校区内の小中学校との交流は、授業や部活動体験などを通して、中学校入学に向けて児童が夢をふくらませたようで、うまく連携が図れた取組である。キャリアパスポートの連携を図るべく、小中合同で部会が開催されたことは、子どもたちの将来のために有効な取組である。今後は高校との連携・交流にも力を入れた取組があるとさらによいだろう。「ネット利用の家庭内の約束」は、今年度も江津市内の全小中学校で取り組んでいるが、時代の流れは急速に変化しており、ネットトラブルもますます低年齢化し、この目標自体が時代についていっていないようにも感じる。教員と生徒が共通理解がもてる講演会は実施されているが、PTAと連携を密にして親子で約束がきちんと守れるような取組を進めてほしい。	B	・授業体験や部活動体験は、児童にとって中学校生活のイメージをつくる上で効果的であり、引き続き実施したい。 ・高校との連携は、美術部の活動で行うことができた。まずは、学年や部活動単位で可能なものから実践していく。 ・「ネット利用の家庭内の約束づくり」や「情報モラル講演会」については、校区内の小中学校と実施し、同じ歩調で連携をすすめてほしい。	
				B	小中高の計画的な交流を積極的に実施						
				C	小中高の交流を実施						
				D	小中高の計画的な交流が不十分						